

柳田聖山編

『祖堂集索引』

椎 名 宏 雄

一

一九八〇年三月に、京都大学人文科学研究所から第一巻が発行されて以来、学界待望の『祖堂集索引』上中下全三冊が、満四年の歳月をついやして完成した。人も知る中国禅宗史学の泰斗であり、右研究所教授の柳田聖山氏による大作の円成である。

知るごとく、『祖堂集』二〇巻は、朝鮮南海道の伽耶山海印寺から、再雕版高麗大藏經の補遺としての、完全な板木が発見されたのは、わが大正のはじめであり、以後、学界の注目をあびるにいたった希代の逸書である。五代の保大一〇年（九五二）という成立は、『景德伝燈録』に先だつこと半世紀、唐五代における禅宗発展期の動向や思想を素朴に伝える、大部の貴重な古資料である。また、近

年は中国文化史の上からも注目され、その研究はしだいに国際性をおびつつある。

テキストについては、大正期に原版からの摺刷がなされ、その濶大をほこる朝鮮本が、本邦では各機関に数点を数えるのみといわれる。したがって、戦後におよぶ二〇数年の間に、中国禅宗史の資料として本格的に本書を駆使したのは、ひとり宇井伯寿博士の『禅宗史研究』全三冊だけであった。本書の研究が活発となるのは、戦後の花園大学で柳田氏を中心とする孔版覆印本の発刊、および近年における相づく影印本の刊行、等をまたねばならなかった。

いっぽう、『景德伝燈録』は、歴代の入蔵本があり、近代の正蔵本・国訳本など、テキストには事欠くことがなく、人名の索引には周知のとうり、松田文雄氏と鈴木哲雄氏のも

のがあり、正蔵本の総索引もすでに発刊されている。これに比較し、『祖堂集』はいまだ活字本すら存在せず、解説そのものさえも容易でない状態であった。索引は、一九六二年に太田辰夫氏による「祖堂集口語彙索引」が発刊され、語学方面で学界を裨益するのを例外とし、人名索引さえもまだつくられていなかった。

筆者は、すでにかなり以前から、柳田氏が二〇万枚をこえる『祖堂集』の索引カードを用意されていると聞いていたし、また事実、柳田氏の主編による「禅学叢書」第四巻の影印本『祖堂集』の影印序（一九七二年六月）では、編者みずから索引の近刊を予告している。予告からでもすでに一二年になるが、編者の『祖堂集』に対する造詣は、これに何倍すること、早くから一字索引の準備を進めてきたことを、編者は本索引巻頭の「緒言」で述べられている。

編者もまたつとにそうした本書の、広い意味での学問的資料価値に注目し、特に請うて、かねて近代中国語・中国文学の研究として知られる入矢義高先生（前研究所員、名大、京大教授）の指導をうけ、本書の本文研究にとりくむこと三〇年、その定

本の作製につとめる傍ら、早くより完全な一字索引の必要を痛感し、潜かにその用意をかきねて、幸いにも昭和四三年度には、財団法人偕成会の研究助成を得、別に財団法人禅文化研究所の好意によって、基礎カ

ードの作製に専念することができた。今年、はからずも京都大学のあっせんにより、国費による出版が可能となったことは、まことに感激至極である。(傍点筆者)

右のように、本索引が世に出るについては、編者と『祖堂集』との長年月にわたる因縁があったのである。編者は、本索引に附録する「解題」の1に、とくに「祖堂集とわたくし」の一章を設け、その関係について述懐されているが、その文末に近く、左記の感慨を述べる。

考えてみると、わたくしはこの本と共に、三〇年を生きた勘定である。今、はからずも人文科学研究所の一室で、「祖堂集索引」のさいごの稿を終えるに当って、わたくしなりの感激を、より新たにし得るのは、ただそのことである。(傍点筆者)

もはや贅言は必要としない。この学界の渴を癒す待望久しい巨冊は、もっともなされるべき人によって成った書であるといえよう。

さて、全三冊の構成内容を細目別に掲げると、つぎのとおりである。

△上 冊V—一九八〇・三・三一刊—

口 絵

緒 言(一九八〇・三・末日、編者識)

P 二

凡 例

P 二

索 引(一—嬢)

P 一—五二

△中 冊V—一九八二・二・二七刊—

索 引(子—纜)

P 五三—二五

△下 冊V—一九八四・二・二九刊—

索 引(缺—龜)

P 二五—四七

絵文字・欠字等の索引

P 四七

音訓檢字表

P 四七—一五五

補正表(上・中兩冊)

P 一五六

解 題

P 一五六—一六〇六

1、「祖堂集」とわたくし

2、近六〇年来の「祖堂集」研究の経過

3、「祖堂集」の成立

4、「祖堂集」の開版

祖堂集本文(影印、付点)

一六〇七—一七五

祖堂集目次

一七六—一七九

右の細目を見るだけでも、本索引が一書の索引としては、他に例をみぬ厩大な分量であ

り、その上、詳細な解題と原文テキストを付した、いわば『祖堂集』の決定版であることがわかるであろう。以下、本索引を特長的にとらえ、それにそって個々の事項を紹介・論述してみたい。

二

本書の特長をあげるならば、(一)一字索引であること、(二)最善のテキストを付したこと、(三)従前の『祖堂集』研究を総括したこと、の三点に集約されるであろう。

まず、第一の特長は、本索引が『祖堂集』二〇巻、約二〇万語についての一字索引であるという点にある。およそ、一字索引といものは、通常の索引に比較して、(一)原文中のいかなる文字でも検索できること、(二)その文字や熟語が用いられる原文が明示されていること、という二点を備えるのを特徴とする。本索引は、まさしくこれらの必要条件を完備するものである。

世に一字索引と称する書は、すでに少なくないが、かならずしも右の条件をみたしているとはかぎらない。ところが、本索引にあっては、原文中のすべての文字が、見出し語として立てられているのである。その総計は、

何と二二〇〇〇項目をこえている。項目には、二字以上の術語はいうまでもなく、「不」「之」「云」「有」「日」「時」「師」「問」などの熟字をなさぬ一文字さえも、すべて掲げられている。したがって、それらの語を含む原文の用例は、膨大な数量にのぼることになる。たとえば、「師」を含む原文は一三九〇例、「有」は一三五二例、最多の「云」にいたっては、実に四八七六例にのぼっている。もちろん、関連する「師云」「有人」「云何」などの語は見出しを別出するから、原文の用例は重出となっている。

重出が多いということは、利用者の側からすれば、それだけ便益が大きいということである。たとえば、「洞山向西院合掌云作家」という一〇文字は、「洞山」「向」「西院」「合掌」「云」「作家」という六つの項目に、すべて原文が示され、「院」「掌」の項目には「院↓西院」「掌↓合掌」のごとく指示し、術語の脚字のみは原文の重複の繁を避けている。要するに、右の一〇文字は、いずれの文字からでも原文とその所在箇所が検索できるのであって、全体では『祖堂集』の親字二〇万に近い驚くべき量の文例があげられているのである。

とまれ、この膨大な文例を導く見出し項目の排列操作は、編者のもっとも苦心するところであった。見出し語の立て方には、さまざまな工夫と創意がみられる。たとえば、同一文字中の同名異人、個有名詞と一般語との区別、などはもちろんのこと、「也」は文末語と疑問詞、「復」は疑問詞とその他、「作摩生」は疑問詞と動詞、等に各整然と分類してあげられている。また、「莫：不」「莫：否」「莫：摩」「莫：也無」「莫：以不」などの区別や、「什摩」「：什摩：」「什摩物」などの区別もなされ、文法上の用例を知るための、きわめて有益な区分となっている。

編者は、本索引のカード作成はもちろん、右のごとき膨大な数量の項目立て、排列操作等の繁雑極まりない仕事を、すべて手仕事で完成されたのである。編者が京大人文研での最終整理のころ、あたかもコンピューターによる漢字処理の技術が、急速に開発されてきた。前掲の「祖堂集とわたくし」の末尾で、編者はつぎのように述べている。

……とくに索引は、すでに機械処理の時代である。わたくしが、「祖堂集索引」のために、原文の断句カードを作ることのほかにも、もっとも苦勞したのは、それらを引き

出すための排列操作、つまり分類方法である。統一を失わぬよう、わたくしはあえて、独力でこの仕事をつづけた。人力では、何んぼ神経を使っても、誤りなきを保し難い。そんな三〇年の努力が、今や完全に無意味となったかと思うと、心中すこぶる複雑である。手仕事によるカード操作と、索引の活字印刷の時代は、すでに過ぎた。バカなことをしてくれたと、一〇〇〇年前の原著者の冷笑がきこえる。わたくしの「索引」三冊は、原著より一〇〇〇年後、最初の仕事であると共に、古風な仕事の最後の記念になるであろう。(傍点筆者)

編者の感慨は複雑であろうが、長年月をついやした手づくりの成果は、本索引の生命となっている。それは、所詮機械力のおよぼぬ研究的操作を必要としたからである。コンピューターは、決して『祖堂集』の研究者ではない。いうまでもなく、利用者の便益性と編者の苦心とは裏がえしの関係にある。索引の利用者は、えてして不便なものには苦情をいうが、いくら便利でも当然とみなす横着性をもつ。しかし、その便益性のために払われた作者の苦心に思いをめぐらせぬ者は、畢竟、学者としての良心を欠くことになる。

なるほど、熟語をなさぬ「云」や「問」などの一文字からの検索は、通常の研究では必要としない。しかし、特殊な学問研究においては、有力な手がかりとなるのである。わたくしごとで恐縮であるが、筆者はさきごろ、一字索引の恩恵に浴したなまなましい経験がある。

最近、自坊の隣寺、真言宗豊山派の古刹寺院が所蔵する、法華経の板木を調査する機会をえた。この古板木数十枚は、二〇年ほど以前に発見され、中世の遺物として文化財の指定を受けたものの、まだ本格的調査がなされていなかった。それを、法華経のどの部分が

残存しているかを知るため、板木一枚ごとの彫字を精査し、それを『法華経一字索引』によって探索した。結果は、意外にも法華経の本文に該当しない板木のあることに気づいたことから、ついにこれらの板木が「無量義経」「観普賢菩薩行法経」を加えた、いわゆる「法華三部経」であることが判明した。右の『索引』は、この三部経を対象とする索引であった。

かくて、当板木は全九三枚中、約五五%を残存する、文字通り天下唯一の珍板であることはともかく、右の一字索引がなければ「三

部経」なることを知るのには容易でなかったはずである。腐朽して、一枚から数文字しか読みとれぬ古板木においておやである。じつは、いかなる文字からでも該当本文を検索できるという点では、この『法華経一字索引』は完璧ではない。にもかかわらず、その便益は、はなはだ大である。重要なテキストにとって、一字索引の必要なるゆえんである。『祖堂集索引』は、今後どれほどの裨益を後学者のために与えつつづけることであろう。

三

本索引の第二の特長は、下冊末尾に附録として、『祖堂集』全巻の影印を合冊したことである。

この影印は三段組みであるが、各一段は高麗原板の一枚ずつに相当し、かつて花園大学で覆印した孔版五冊本、および、中文出版社刊行の影印本と同じページと五行ごとの行数を付し、検索の便をはかっている。また、影印原文には全文に句読点「。」を付し、読解のために多大の便宜を与えている。ただし、『祖堂集』の本文に句読点を付したテキストは、本書を嚆矢とする。これらの諸点において、本附録本は多くの『祖堂集』中、最善の

テキスト提供であり、これを索引と合冊したことは、利用者にはかり知れぬ便益を与えたものである。

従来、『祖堂集』のテキストには八種があり、本附録本を加えると、左記の九種となる。

①高麗、高宗三十二年(一二四五)、分司大蔵都監刊、後刷本、二〇巻二〇冊(又は一〇冊)

②覆印本、一九四九〜一九五〇年孔版、花園大刊(第一回)、五冊

③同、一九五二年孔版、同(第二回)、同

④同、一九五四年孔版、同(第三回)、同

⑤影印本、『暁城趙明基博士華甲記念仏教史学論叢』(一九六五年、韓国東国大学校刊)附録

⑥影印本、『禅学叢書』四、一九七二年七月、京都中文出版社刊、一冊

⑦影印本、一九七二年九月、台北広文書局刊、一冊

⑧影印本、『影印高麗大蔵経』四五所収、一九七六年五月、東国大学校出版部刊

⑨影印付点本、『祖堂集索引』下附録、一九

八四年二月、京都大学人文科学研究所刊
右の九種中、本索引が適用できるテキストは、②③④⑥⑨の諸本である。就中、編者柳

田氏が、かつて苦心して原本通りに孔版覆印した②③④の各五冊本に付されたページが基本となっている。⑥の中文出版社本は影印であるが、やがて刊行されるべき索引に備え、右の五冊本の冊次とページとを付したテキストであった。

この点、⑥とほぼ同時期に刊行された⑦の広文書局刊行の影印本には、各冊のページこそ付されているが、惜しむらくは冊次の記入がない。そのため、本索引による迅速な検索には用がたりぬ。かくして、覆印本三種もすでに希観書となりつつある現在、本索引の適用すべきテキストは、⑨の附録本と、影印文字のより大きな⑥が最適といえる。

ところで、本索引を利用するほどの者は、右に掲げた九種のテキストの中で、影印本の五種には、それぞれ基本的な長短があることを知らねばならない。すなわち、五種を精査すると、文字の大小、影印の鮮明度、原板の不明文字への補筆、活字の補刻、等の相違点や問題点がみられるからである。いま、これらの諸点を、影印本別に対照してみよう。

われわれが、影印本をテキストとして用いる場合、もっとも注意すべきは、原本の不鮮明な個所に補筆・改刻・繫結などの改変が施

影印本	版字		影印の鮮明度	付活字	
	組文	字		墨補索引	刻活適
⑤ 論叢本	三段小	濃淡あり、行間不統一	無	無	×
⑥ 禅学叢書本	二段大	比較的鮮明	有	無	○
⑦ 広文書局本	二段大	比較的鮮明	有	無	○
⑧ 麗蔵本	三段小	鮮明	多	多	×
⑨ 索引本	三段小	やや不鮮明	無	無	○

されている場合である。概して、中国人の手による影印本にかかる例が多く、より良いテキストを提供しようとする姿勢は多とすべきである。しかし、ナマの原資料をみようとする立場からは、迷惑至極の作為となる場合もある。つまり、一字索引がつくられ、欠字数による見出しすら立てられるほどの厳密さを要求される原本としては、それがナマの形に近いほどよいことは、いうまでもない。

『祖堂集』の場合、索引が適用されうるテキストで、原文に何らの手も加えていないのは、右表に示したごとく⑨の附録本だけである。『祖堂集』二〇巻中、原板の摩滅・腐朽が著しい個所は、巻四の第一〇丁（葉山惟儼章）と巻六の第三丁（投子大同章）である。いま、この部分を主として各影印本を対校し

てみると、興味ある事実が判明する。

すなわち、⑥における補筆は良心的であるが、⑦には誤った文字の補筆があり、⑧の麗蔵本には補筆と活字の補刻が多くみられる。いったい、⑧は海印寺に現存する原板木を精査しての補筆・補刻であったかどうか。もしそうでなければ、はたしてなにを典拠としたのであろうか。それらの補筆・補刻文字の多くは、①の高麗原板後刷本を見ても解説不能なものが多いからである。こうしてみると、⑨の本索引附録本は、原本の版心こそ省略してはいるが、原文に関してはナマの資料を提示した点で、現行影印本中、もっとも善本といえる。

ところで、本索引の適用しうるテキストは、当然ながら、いずれも花園大学所蔵の高麗原刻本にもとづく覆印・影印であった。柳田氏によれば、花大本そのものは、摺刷の古い善本であるという。この朝鮮本は、もと伽耶山海印寺住持の林幻鏡和上から緒方宗博氏に譲られ、戦後、花園大が新制大学となった記念として、緒方氏から寄贈された、いわば由緒深い貴重書であった。筆者は、現行影印本類を駒大所蔵の高麗原刻本二種と対校した結果、たしかに花大本は摺刷の良い善本であ

ることを傍証することができた。

ちなみに、駒大本二種については、従来ほとんど未紹介であるから、ここでふれておこう。一本は、原板木の二倍強の長さの細長い紙を用いて半面に刷り、これを横に二つ折りの袋にとじた、裏白のぜいたくな長大本二〇冊である。他の一本は、原板木から刷った部分だけを二つ折りの袋にとじ、二巻ずつを一冊仕立てとした四角い一〇冊本である。この仕立ては花大本と同じである。摺刷は、概して角形本の方が良好で、長大本はややおちる。花大本の摺刷状態は、角形本とほぼ拮抗する。

所蔵は、長大本が大正一四年一〇月、大正一切経刊行会からの寄贈、角形本は同年一二月に五十嵐絶昌師からの購入である。わずか二ヶ月の間に、同種の貴重書二部が相ついで所蔵されたのには、定めて深い理由があったことを予想させる。大正一切経、すなわち大正新脩大蔵経は、当初、『祖堂集』を収録する計画をもちながら、なぜか実現しなかった。このことと、当刊行会より駒大への該書の寄贈とは、おそらく密接な関係があったと思われる。

ともあれ、駒大には花大よりも二〇年あま

りも早く二種の『祖堂集』を所蔵しながら、

これを本格的に読んだ者は、おそらく宇井博士ぐらいではなかったであろうか。角形本の原文不明の箇所にはペン書きの傍書がみられる。あるいは、宇井博士による書き込みか。該書を縦横に用いる『第三禅宗史研究』の定稿化は、昭和一五年から一七年にかけてであり、それはあたかも博士の駒大総長時代とかさなる。いずれにしても、駒大で長らく『宝の持ち腐れ』をしている間に、戦後の『祖堂集』研究は、完全に花園大が主流を占めることとなったのである。

ただし、一九六七年四月から、駒大の宗学研究所の演習として、鏡島元隆教授の指導のもとに、『祖堂集』の会読が開始された。この演習は、のちに大学院の演習にとひきつがれ、一九七八年度中に一二年間を要して全二〇巻を読みおえた。遅ればせではあるが、外国人留学生たちをも交えてなされたこの演習は、駒大の若い学徒に『祖堂集』への本格的な関心を喚起した点で、その意義は大きい。とまれ、今や『祖堂集』研究は禅宗史の分野をこえて、そこに多様性と国際性が加わる。本索引の完成は、斯学の向上にますます拍車をかけることとなるであろう。

四

本索引における第三の特長は、従来の『祖堂集』研究を総括し、新たな学説を提起した点である。附載する「解題」の(二)以下がそれであり、解題というよりも、むしろ研究論文といってもよい。一見、索引そのものとは直接の関係がないようではあるが、この解題が付されるところに、本書の特徴がある。前述のごとく、本索引は編者において、余人のよくなしうるものではない。『祖堂集』を完璧に読破し研究された編者にして、はじめて可能だからである。

正直なところ、筆者は駒大での鏡島教授の演習に、はじめから参加している。テキストは、一九六〇年に花園大から購めた五冊本であった。二〇万語の一字一字を、柳田氏が書き製版された孔版である。余談ながら、氏の独特の手蹟は、この何千枚という製版の結果であるという。筆者は、爾来『祖堂集』に親しむこと一八年、通読は三度に達するが、はずかしながらいまだに解読不能の箇所は少なくない。しかるに、本索引の附録本では、これらの箇所に正確な付点が施される。のみならず、他に誤読を指摘される箇所も少なく

ない。こうした卑近な一例からも知られるように、本索引の作成は、本文の研究と必然的な相関関係にあるのである。

それゆえ、索引づくりとともになされてきた本文研究成果を、索引の上梓とともにまとめておくことは、編者にとって必然的な経緯であったと思われる。かくして、「解題」における異例の四〇ページという分量は、むしろ必要にして最少の分量であった。

「解題」の2以下をみよう。2は「近六〇年来の祖堂集研究の経過」とし、『祖堂集』発見以降、本索引にいたる研究の経過をまとめている。まず、該書発見の動機を、(一)高麗版仏典に対する評価の高揚、(二)敦煌文書等の大陸における新発見の日本・朝鮮における仏典調査への促進、という二点に集約する。そして、該書に対する学界の関心を、

言ってみれば、初期禅文献に対する、昭和初年以來の新しい関心は、大正新修大蔵經に漏れる、藏外典籍の再発見と共に強まる。「祖堂集」は、そうした動きの中核であった。

と述べる。こうした広い視野に立つ文献資料への適確な位置づけは、いつもながらの編者の達見である。

柳田聖山編『祖堂集索引』(椎名)

ついで、『祖堂集』に関する諸方面の研究成果、五四点を年代順にあげている。いうまでもなく、該書に対する従来の研究成果を一望しうる便利な目録である。ところで、この五四点中、柳田氏自身のものが一点、他は宇井博士の三点が最多であって、いかに『祖堂集』研究が編者の独断場に近いかを、あらためて知らしむるものである。ちなみに、柳田氏による成果中、『祖堂集』の資料価値(一)〔禅学研究四四、一九五三年〕は五〇ページ、『祖堂集』の本文研究(一)〔同五四、一九六四年〕は実に七七ページ、「世界の名著」続三の『禅語録』(一九七四)中における抄訳は一九〇ページにのぼっている。

「解題」の3は「祖堂集の成立」である。まず『祖堂集』の序者、浄修禅師文燈とその周辺について説明する。この記述は、前記の一九五三年の論文を基礎におくものである。ついで、『祖堂集』の素材となった『宝林伝』『続宝林伝』、および『景德伝燈録』以後における多くの燈史文献の成立と性格とを、『祖堂集』との関わりの上から鳥瞰的に論述する。こうした燈史類に対する見方は、「燈史の系譜」(日仏学会年報一九、一九五四)以来、一連の深い造詣をふまえた編者の卓見である。

次に、『祖堂集』が大陸で伝を絶つ以前、宋代における引文、著録類四種をあげ、その意義を説く。それらの書名と、引文等を最初に指摘した者をあげると、つぎのごとくである。

(一)契嵩(一〇〇七―一〇七二)撰『夾註輔教篇』……(編者)

(二)張方平(一〇〇七―一〇九二)撰『禪源通録序』……(石井修道)

(三)四明知礼(九六〇―一〇二八)撰『十不

二門指要録』、石芝宗暁(一一五一―一

二一四)撰『四明尊者教行録』……(宇

井伯寿)

(四)『崇文總目』(一〇三四)……(筆者)

かくて、『祖堂集』が所伝を絶つのは、『景德伝燈録』の入蔵を契機に、前者の評価をしいだいに弱めていった結果、と論述する。

ところで、わずかながらも『祖堂集』を引く文献が存するからには、北宋代には該書がまだ重要な立場にあったことを示唆するものである。今後、さらに引文等が発見される可能性があり、この辺の消息がより闡明になることを望みたい。

「解題」の4「祖堂集の開板」は、総括のさいごにふさわしく、随处に最新の高説が披

歴される注目すべき一章である。まず、『祖堂集』が高麗再雕大藏經の補遺として分司大藏都監で開版される事情を、開版者匡僂の附記を手がかりとして追求する。

すなわち、高麗の匡僂による編集事項は、

(一)全二〇巻の分巻、(二)巻首と巻尾の標題の追加、(三)目録の新設と目録中の割注の新加、(四)本文を石頭下・江西下とする排列、の四点であるとする。この匡僂による編集がいかなる範囲であるかは、『祖堂集』の原文そのものを、すべて九五二年の時点でおさえられるか否かにかかわる重大な問題点である。柳田氏は、匡僂の編集は右の四点の範囲とし、本文は九五二年当時のままを伝える、とされる。実は、筆者はこの問題に対して、かつて疑義を呈したことがあるが、今後さらに検討をかさねてゆきたいと思う。ともあれ、柳田氏の所説中の第四点は、「新統灯史の系譜、叙の二」(禅学研究六〇、一九八一年)における精緻な考証をふまえた新説である。

つぎに、匡僂の附記中、「祖堂集一卷が半島で行われ、後にまた一卷が届いた」という謎の記述を追究する。まず、『景德伝燈録』がすでに半島で行われていたのに『祖堂集』を開版した理由を考え、(一)該当には新羅人の

手によるとみるべき多くの新羅僧の伝記を収めることから、原著は『宝林伝』を承け西堂智蔵下に源を発する新羅禅の源流を明らかにするために編集された書なること、(二)瀉仰宗の円相を半島で新たに展開した五冠山順之の伝を収めていること、(三)一三世紀の半島における九山禅門再編の気運が熟する時期における新羅禅への関心の高揚、などの諸点を鋭い考証と深い推論によって立論される。そして最後に、半島への『祖堂集』の伝来は、(一)馬祖にはじまる新羅僧の入唐を伝える後半部分、(二)その前半部分、の順であろうと推論して、この長い「解題」を結ぶ。

高麗開版の事情を伝える客観資料が皆無の現状下にあつて、編者によるこれら一連の立論は、匡僂の附記を虚心に読むことを基礎として展開した、現在望みうる最高水準の学説といえる。個々の問題については、すでに編者の論文による所説も少なくないが、ここでは、それらすべてが総括される。かくて、この「解題」は、燈史文献としての『祖堂集』の基本的性格に関する完全な解題であるとともに、今後、この索引を用いて大いに進展させるべき『祖堂集』学究者のための、必読の論攷といえよう。

かくして、本索引の刊行は、『祖堂集』が内包する唐五代の歴史・思想・言語・文化、各分野における絶大な資料価値を、千古の霜雪を経て万人に敷衍せしめた点において、人文科学界希世の快挙と称すべきであろう。

以上、本誌編集者からの慇懃により、望外にも『祖堂集索引』を紹介したが、筆者は、この大著に対して当をえぬ紹介や閑説をなすばかりか、重要な点に筆の及ばぬことをおそれるものである。これらの過誤は、ひとえに筆者の浅学菲才によるところであり、柳田氏の学恩を蒙る末席を汚す者として、その咎は重く罪は深い。ただ伏して、編者の御海容を乞うのみである。

さいごに、本稿を草している時、某古書店から送られてきた古書目録を見て驚いた。なんと、『祖堂集索引』上中下三冊、一五万円とあるではないか。もはや本書の初版は品切れのようで、早くも古書店の市価を暴騰させているのだ。望みうるならば、この画期的な名著を入手するため、若き学究者たちにとつてますます酷い価額とならぬうちに、ぜひとも再版をと願うのは、筆者だけであろうか。

(一九八四、九、二五)